

勤儉尚武 勤儉尚武

vol. 24

去る5月2日(土)~4日(月)に松阪市武道館にて弘道会会長の大島実先生をお迎えして、恒例の昇段審査会及び特別稽古が行われました。今回は参段が1名、弐段が4名、初段が7名の計12名が受験しました。受験者は昇段審査を目指して、1年以上前から準備をしてきました。心身共に相当大変だったと思います。ご苦労様でした。

【昇段審査会】

指導する立場の私から見ても、受験者全員が大変素晴らしかったと思います。技の出来栄えには個人差がありますが、昇段審査は技の優劣を競うのではなく、審査に向けてどれほどのエネルギーを注ぎできたかを見るものです。その意味から、全員が昇段に値する十分なエネルギーを稽古に注いで来られたと思います。今年に入ってからは、土曜日の午前中に自主稽古をしようと声を掛け合って稽古に励まれていた事はよく存じております。陰ながら応援しておりました。また、稽古に頻繁に出られる方、仕事の都合で稽古にあまり参加できない方など事情は様々ですが、日曜セミナーや合宿などで稽古不足を補ったり、様々な工夫をされた事も頭が下がる思いです。

また、審査のもう一つの重要な点は、受験者が周りの人々に与える影響です。特にこれから昇段審査を受験しようと思っている方には非常に大きな影響を及ぼします。学生でも、最近は塾やクラブ活動などで忙しいので、なかなか稽古時間を作り難いと思います。その稽古不足を如何に補うか、また稽古に対する心構えなど審査前に学ぶ事がたくさんあります。また、審査本番では極度の肉体的疲労のために、思わず涙があふれ出る若者も数人いましたが、それをこらえて立ち向かっていく姿は、年齢に関係なく感動したと思います。



【 特別稽古の様子 】
(杖を使って高度な技の稽古)



【 特別稽古の様子 】
(最高齢の五味さん、我々の目標です)

このような経験は、何物にも変えがたいと思いますが、「冷暖自知」、その場にはないと自分のものとして捉えることはできません。今回参加できなかった方も、来年は是非参加していただきたいと思います。12名の審査は3グループに分けて毎日行なわれました。1日でも参加された方は、大きな収穫だったと思います。

今回の昇段審査会でも、審査基準に基づいて特別稽古が行われました。この稽古は、昇段審査を受ける方のためだけではなく、参加者全員が技を正しく理解し、正しく行う事を目的としています。

真 剣 勝 負



【杖投げの正しい動きを練習している】

昇段審査の受け身を取る有段者が10名以上必要なのですが、幸い大阪から3名、東京から4名が参加してくれましたので、何とか不足を補う事ができました。

大阪や東京からわざわざ来られる程この特別稽古は大切な稽古なのです。年に2回春と秋にししか大島先生から習う機会は無いです。審査をしていただく先生ですので、先生が基準なのです。



【特別稽古・昇段審査会後の集合写真】

今の世の中では、大学入試や検定試験などでも情報開示とか言って全てを明らかにしなければならない風潮がありますが、日本の伝統文化である武道は全く異なります。言葉や数字では表せない要素がたくさんあるのです。

今回の「勤儉尚武 Vol.24」では、日本の伝統文化を学ぶという観点から書きますので、最後まで熟読してください。

【「私が！私が！」の時代】

近代の平等思想は素晴らしい事なのですが、平等なるが故に自己をあまりにも主張しすぎる傾向があります。私という自我を強調し、自己の権利ばかりを主張し、つい相手の権利を忘れて、互いに一步も譲らないかたくなな心となり、それが対立の原因となります。

誰でも「自分」が一番大切なのですが、「私が！私が！」と自己を表に出しすぎる風潮、自己顕示欲、利己主義がお互いの衝突のもとを作ります。親子の対立、家庭内の対立、社会の中での対立、国家間での対立です。そこから争いが生じます。お互いが相手の立場に立って考えてみる思いやりの心を全く見失った状態です。

今日の新聞紙上を、テレビ報道をにぎわしている出来事、事件が如実に現代人の自我という牙を露に出した、自己顕示欲から起きたものであることを物語っています。

芥川龍之介氏の『蜘蛛の糸』という小説に、次のような一節があります。(要約)

「お釈迦様が蜘蛛の糸を使って蓮の池の下にある地獄から一人の男を救い出そうとして、地獄の底に細い蜘蛛の糸を垂らします。それを掴んだその男は上へ上へと手繰りあげましたが、途中で後を追ってくるたくさんの罪人に気が付き、「下りろ！下りろ！」と喚きました。その途端、この蜘蛛の糸は切れて、その男はもとの地獄の血の池に落ちました」



この話は、有名な話なのでほとんどの方がご存知だと思いますが、私は小学生の頃「道徳」の教科書に出ていたのを覚えています。何を言わんと

しているかは言うまでもないと思いますが、「人間は自分さえよければという利己主義、自我によって道を間違えてしまうと言う、仏教の教えなのです。私たち一人一人が「足る事を知る」(今年度の月謝袋の裏面の言葉)に気がつき、自分を捨て、思いやりの心でお互いに幸せを共有する時、自から平和な社会が成就するものと信じています。



わ 吾 だ 唯 た 足 る を し 知 る

(上のマークにこの四文字が含まれている)

【伝統文化としての武道】

武道では失敗すれば、生死に関わりますがスポーツでの失敗は生死には関わりません。これは、武道とスポーツの違いの一つです。武道では、確固たる哲学に支えられた技や修練法が連綿と先達から受け継がれていて、「命がけで修行して会得した技を教えていただく」わけですから、弟子は師に対して絶対の信頼を持ち、最大限の礼を尽くす必要があります。弟子が礼を尽くす事によって、師も弟子に技やその精神を伝えてきたのです。



【ある会員のお世話で稚鮎を網で捕獲】

大島先生がこられる時、私を含め皆でお世話をさせていただいております。時間・体力・お金を厭わず、誠心誠意おもてなしをしているからこそ、弘道会ではない私たちのために、惜しみなく技やその背後にある哲学や、先生が命がけで修行してこられた事を我々に教えてくれるのです。

また、その共有した時間から我々は先生から色々な事を学べるのです。



【大漁！この日、第二道場で衣揚げをしてもらって、生ビールで乾杯！】

もし、弟子が師に対して不信感を少しでも持てば、それは師の心に映り、また弟子の心も曇り、その時点で修行は出来なくなってしまいます。

これが、師弟関係のあるべき姿です。昔は内弟子制度が当たり前で、師と寝食を共にし、師の一挙手一投足から様々な事を学び、師の身の回りの世話をしながら技を身に付けていったものです。このような師弟関係は、現在では大人でも知らない人が多いので、日本の伝統文化である武道を稽古しておられる当会の会員の皆様には是非知っていただきたいと思います。ただ、このような世の中で育った子供にはそのような事はわかりませんので、大人は少なくとも子供の前で先生の悪口を言う事は避けなければなりません。その様な事をしていては、子供が一所懸命頑張っても身に付くはずの技や心も身に付かなくなります。

【修行の心構え】

私の知人で、現在 78 歳の建具師の人がいます。若い頃住み込みで師匠に弟子入りをして技術を身に付けたそうですが、最初 3 年間は食べさせてもらうだけで、給料はもらえなかったそうです。でも、修行を続けて一人前にしてもらったお陰で、その人の技術は宮内庁にも認められ、天皇陛下が伊勢神宮にお越しになる時献上される牛乳箱を製作することもあり、78 歳の現在も仕事の依頼があるそうです。

この方を見ていると、修行は一生涯続けるもので、ただひたすら師匠の教えを守る修行時代を経て（守）、創意工夫をすることによって自らの技術を高めて師を乗り越え（破）、更に自分独自の流儀を展開していく（離）、武道の修行と相通じるものを見ることが出来ます。（これを「守破離」と言います）

【月謝】

師に礼を尽くすことを述べましたが、内弟子制度が廃れてしまった現在、礼を尽くす方法は少し形が変わったといえます。

例えば、稽古が終わった時いつも決まって私の袴をたたんでくれる若者が何人かいます。これも一つの「礼」です。そのことによってその人の気が私に伝わってきます。そして、それを稽古の中でお返しをします。

また、「月謝」としていただいている月会費も一つです。ここで、月謝の本来の意味を考えてみたいと思います。

以下は歌舞伎の関係の資料から引用したものです。

「月謝の納め方」

お稽古事には、カルチャセンター、また本格的な先生に付く。

又内容も日本の古典芸能から欧米由来の趣味などなど数え切れないくらい有ります。

それにつき、月謝と言うものが発生します。

ところで、都合でお稽古をお休みすると言う事も当然有ると思いますが

そのとき皆さんは月謝をどうなさいますか？

『お休み月は、届けを出して月謝を納めない』
と考えると居られませんか・・・

本来お稽古事で「お師匠様に付く」と言えば休む休まないに関わらず決まった月謝を必ず納めるのが

古来、先生（師匠）に対する当然の礼儀です。

京都でも、昔から習い事が盛んでした。

月謝を納めるというのは、趣味を極めるという事を目標にしますが

一面、先生なり師のサポーターになるという要素も重要なのです。

昔風に言えば、旦那衆が（男性だけでなく女性でも）ご最賃の一つの表わし方でもあったのです。

このような考えは、例えば学校や塾の月謝と比較すればわかることだと思います。師なり先生をサポートする事によって「教え」を頂いているわけですから、休む・休まないに関わらず「礼」としての月謝はきちんと納めるべきものなのです。大学などの授業料は年額で納めますが、稽古の月謝は、習う側に配慮してそれを 12 ヶ月で分割しただけの事です。

一つの会なり流派を運営するためには、それなりの費用が必要です。更に先生も修行を続けていくわけですから、その修行の手助けをするのも弟子の役目なのです。そのことによって弟子たちにもまたより良い「教え」が伝授されるのです。

ここで改めて、藤平光一先生と大島先生と私のプロフィールをご紹介します。

【藤平光一先生】

合気道に入門

19 才の時、本当の強さを求めて合気道の開祖・植芝盛平先生に入門。合気道を学ぶ。

中村天風先生との出会い

終戦後、再び、禅、みそぎ、合気道の修行に打ち込むかわら、音羽の護国寺で統一道を説いておられた中村天風先生に師事する。天風先生の教えから「心が身体を動かす」という原理を知ると同時に、会得する。そしてこれを生涯の指導の中心とする。その後、藤平光一は天風先生より絶大な信頼を得る。

実力で氣の威力を証明

53 年、だれもが自由に海外に行くことができなかった時代、特別に渡航が許され船でハワイに渡る。現地ではいきなり大柄のプロレスラーや武道の有段者と対戦さ

せられるが、ひるむことなく相手を次々と投げ飛ばし、押さえ込む。その情景を見た人たちが次々に入門していった。

ハワイの州警察が藤平光一の指導を仰ぐようになり、以後、継続して毎年、研修が行われている。

アメリカ各州で普及活動

ハワイでの指導を皮切りに、頻繁にアメリカに渡るようになる。カリフォルニア州、ネバダ州、アリゾナ州、ワシントン州など、**21**州を次々に自らの足で回り指導していった。

王貞治選手の一本足打法を指導

巨人軍に入団した当時、伸び悩んでいた王貞治選手の指導にあたる。コーチの荒川氏に頼まれ、新宿本部の道場で一本足打法の指導を行った。このとき、片足を上げてもぐらつかない氣の活用法を伝授。後にホームラン記録を次々と塗り替え、世界のホームラン王となる礎となった。

ON砲の裏に氣の指導

王選手に指導した1年後、長嶋茂雄選手にも指導する。バットを氣で持つことを指導したところ、すぐに理解し活躍。以後、王選手と長嶋選手のアベックホームランが観客を湧かすようになる。

長嶋選手は監督に就任後、チームがリーグ最下位に転落した年の9月、一軍選手全員を新宿本部の氣の道場に送り、藤平光一の指導を受けさせたこともあった。

氣の研究会及び心身統一合氣道を創立

71年、国内に「氣の原理」を普及するために、「氣の研究会」を創立する。

74年には、氣の原理にもとづく合氣道の必要性を強く感じ、「心身統一合氣道会」を創立する。

77年に、厚生省（現・厚生労働省）から国民の健康に寄与することを目的とした財団法人を認可され、財団法人 氣の研究会となる。

ハワイ出身力士、高見山に氣の指導

ハワイの門下生から高見山（ハワイ出身の力士）への指導を要請され、氣の指導を行う。高見山はその場所で外国人力士として初めての幕内優勝を果たす。しかし、相撲取りが他の分野から教えを請うことを認めない親方に止められ、継続できなくなった。



中日ドラゴンズへの指導

プロ野球界では巨人がV9の偉業を達成した翌年、中日ドラゴンズのキャンプで氣の指導。そのシーズン、ドラゴンズは巨人を押さえて優勝を果たした。

千代の富士の脱臼を見る

この頃、当時横綱になったばかりだった千代の富士関が左肩を脱臼。思うように回復せず、再起が危ぶまれていたとき、藤平光一の氣圧を受けると、完全に回復。それから**53**連勝の偉業を達成した。



西武ライオンズの選手一人一人を指導

また西武ライオンズの当時の監督、広岡達朗氏が藤平光一に氣の指導を受けていたことをきっかけに、選手全員の氣の指導を行う。新宿の道場に、入れ替わり立ち代り、ライオンズの選手が氣の指導を受けに通った。その年から西武は優勝を続け、黄金時代を築いていった。



【大島先生】



1969年 合気会本部道場で合氣道を始める。

1971年 合気会本部師範部長藤平光一氏に師事。藤平光一氏が(財)氣の研究会設立の際、氏について行く。大阪地区最初の道場開設に貢献。

1974年 渡米。ロサンゼルス地区で指導。その間、コロラド州アスペンで、フォーク歌手ジョン・デンバー氏の主宰する Martial Arts Academy で1ヶ月間指導。

1980年 フロリダ州に弘道会合氣道設立。

1982年～1985年

フロリダ州刑務所の刑務官2000人以上に合氣道を指導。また、フロリダ州警察の警察官に護身術を指導。更にハイウェイパトロールでも合氣道を指導。

2007年 オーストラリアアデレードにて第二回セミナーを開催。

第1回松阪地区医師会主催護身術セミナーで指導

現在、カリフォルニア州サンディエゴに在住。フロリダ州オーランド、ゲインズビル、ニューメキシコ州、カリフォルニア州サンディエゴなどに道場を持ち、最近ではサンディエゴに拡大を続けるカジノ、「ペチャンガ」のセキュリティー担当者に「セルフコントロール」を指導中。

日本国内は、東京八王子、羽村、山梨県甲府市に傘下の道場を持ち、三重県順心会、大阪水心会などでも指導。

【橋本順武】

1978 合気会で合氣道を始める。

1979 (財)氣の研究会で合氣道を始める。

1982 (財)氣の研究会合氣道初段を授与される。大学卒業後、地元松阪で氣の研究会合氣道教室を開く。この年から、(財)氣の研究会合氣道会長藤平光一氏より直接の指導を受ける。

1986 弐段を授与される。

1991 (財)氣の研究会心身統一合氣道体技審査競技会全国大会で金賞を受賞。副賞として参段を授与される。

1992 氣圧学院に入学。

1993 (財)氣の研究会心身統一合氣道体技審査競技会全国大会で二度目の金賞を受賞。副賞として四段を授与される。同時に第一回厚生大臣賞を受賞。

1998 氣圧学院を卒業。

2000 会長引退、2代目会長退会后、会と方針が合わず、(財)氣の研究会を退会。順心会合氣道を設立。

2006 オーストラリアのアデレードで、第一回セミナーを開催。

2007 弘道会合氣道会長大島実氏と共に再びオーストラリアのアデレードで第二回セミナーを開催。弘道会合氣道五段を授与される。

2008 オーストラリアのメルボルンとブリスベンを訪ね、第三回セミナーを開催。第2回松阪地区医師会主催護身術セミナーで指導

2009 7月、オーストラリアのアデレード・メルボルン・ブリスベンでセミナーを開催予定。第3回松阪地区医師会主催護身術セミナーで指導予定。

今後、毎年オーストラリアにてセミナーを開催予定。

2010年には、日米豪欧合同合宿を予定している。

大島先生は、合氣道開祖植芝盛平翁の合気会本部で師範部長を務められた方で、(財)氣の研究会創始者藤平光一先生の内弟子をされました。また、私も藤平光一先生より長年直接指導を受けてきました。手前味噌ですが、順心会合氣道はこのような素晴らしい環境で稽古ができる素晴らしい会だと思えます。

【写真集】



【第二道場で打ち上げ】



【美女に囲まれて、プレゼントを持つ大島先生。25名が参加し、参加者が少しずつ出し合ってお祝いのケーキと、記念品（松阪木綿の製品）をプレゼントしました。】



【大島先生の20-40-60祝賀会】



【セミナーの翌日、鳥羽の離島、答志島にて】



【お祝いのケーキ】



【皆さんから頂いたご厚志で購入した松阪木綿のシャツを試着する大島先生。でも、既製品ではサイズが合わない!】